

研究資料

大仏師院勝作京都仲禅寺金剛力士像

猪川 和子

院派仏師については近年新しい資料が多数発見され、紹介されている。^{註1}鎌倉時代以降の院派仏師の造像中、院能作、建保五年（一二二七）の京都寂照院四天王像は、京都東山の仏師佐川定慶氏が修理の際墨書銘を発見され、摂津の僧良心等の発願による像であることが知られた。この京都仲禅寺の金剛力士像も、昭和五三年十二月、同氏が修理のため解体したところ、院派仏師である院勝が、文明十三年（一二四八）に造立した墨書が発見され、新たに基準作例^{註2}が加わった次第である。

京都府竹野郡網野町曹洞宗、中央山仲禅寺は、日本海に近い丹後の国に位置している。寺伝によれば和銅六年草創、のち智証大師の開基と伝え、本堂、塔、仲房、西、東、南三房、下寺、屋敷、山門、仁王門を有し僧徒修行の場として栄えていたが、永禄六年（一五五二）十二月晦日に出火、焼失、仁王像だけが残ったという。宝暦三年（一七四一）京都室町高辻下るの仏師棟梁水谷作之進、同衆仏師甚兵衛、平八が修理、宝暦四年、九年にも修理、^{註3}また天保十四年（一八三〇）に仁王堂と仁王を修理、明治廿七年にも修理が行われた。現在は小堂が残り仁王門が再建され、檀家が守っている。

解体時の状況は、吽形像の頭部が比較的よく保たれていたが、玉眼は落ち、体軀の破損も相当にひどく、呵形像は、面部も鼻の人中辺から下が朽損していた。頭部は三道下で割矧ぎ、さし首となっており、耳後で前後に矧ぐ。いずれもヒノキ材。吽形像の頭部前面の内部、首の辺りと、後頭部に墨書、呵形の玉眼に修理の墨書が発見された。

（吽形、前面首内部 墨書）

大仏師大輔法眼院勝

山城国住

仲禅寺衆僧衆徒等

十一人同児五人

座方十一人

于時文明十三年

三月中旬

三月廿三日ヨリ 筆者 頼舜

三月三十作了

（同 後頭部内面墨書）

南無阿弥陀仏

梵字 頼舜

円 禅

当寺

住僧等

慶海 後生出処敬文

（呵形 玉眼押え木 墨書）

明治廿七三月

両眼トモ玉ヲ直シ

作入峯山

森田栄三郎

（同玉眼内納入紙片に寄進の品書あり）

修理完成後の像高は吽形二一八センチ、呵形二一七センチ。吽形面長九二センチ、吽形像は頭部の基本的な部分はそのものを生かして足先その他の朽損材を新補し、原形に近く修理された。呵形像は頭部以下、大分新補された。吽形像の体軀は基本が四材に分かれ、各々細かく補材がある。足は脇材と共木、内刳される。腕も二材はぎで内刳がある。体軀はカヤ材で、頭部がヒノキであるのと異っており、あるいは宝暦時の再興とも考えられる。

仏師院勝については、寛正五年（一四六四）広隆寺楊樞木坊の毘沙門天像を造ったことが大仏師系図に記され、永正六年（一五〇九）院派仏師相伝の丹波国分寺地頭職に紛争が起ったことが知られているだけで、作品の存在は不明であった。文明十三年（一四八一）の銘のあるこの像によって、略々半世紀に及ぶ院勝の事蹟がその中間の時期に具体的なものとなることは意義ふかい。

永正六年十月五日付の雨森家所蔵文書^{註4}によれば、絵所土佐光信と仏師院勝が、丹波国分寺地頭職を争って、幕府がこれを裁き、各々その半地を領させたことが記される。調べの結果、院勝には代々の証文があり、光信は勅詔を主張しているが、光信の証文に還補の本文なく、院勝はほしのままに下知をかすめた咎により、地頭職を折半し、領させたというのである。

丹波の地頭職については、雨森家文書に、足利尊氏が京都に菩提寺等持院を創立、印元を招請した際、暦応二年（一三三九）七月二日足利直義が丹波国分寺地頭職を寄附し、等持院本尊地藏像造立の料に充てたことが記される。本尊造立の仏師は法印院吉であった。院吉はのちに丹波国分寺地頭職をつとめ、明徳四年（一三九三）院誓は等持院大仏師職を安堵され、永享十一年（一四三九）から文明十一年（一四七九）まで院実が丹波国分寺地頭職についている。このように院派の丹波国分寺地頭職は既得権の様相を見せている。文明十三年、院勝が大仏師大輔法眼を称し、丹波国とは隣接の丹後の仲禪寺の仁王像を造ったことは偶然とは思われない。

挿図1 金剛力士像（吽形）頭部 修理前
京都 仲禪寺蔵

この金剛力士像の作ゆきは、体軀の造型、動勢等、度々の修理を経ているために、充分に原初の形をとどめていない点も窺われるが、修理前の頭部を見てもわかるように、鼻目、肉

どりなどなかなかの手腕の持主であることを物語る。形式的に最も近い姿の像としては岐阜の横蔵寺像がある。動きが比較的穏和で、裳の翻えりも激しくない。

胸や腹部の筋肉の表現も近い。横蔵寺像は、建長八年（一二五六）定慶等の作である。横蔵寺像のように整った均衡、ひきしまった表情には遠く及ばないのは、作られた時代の大きな開きによることは云うまでもない。

鎌倉時代の院派の作として明らかな金剛力士像に、神奈川称名寺の元亨三年（一二三三）の院興、院救、長賢等の作が

挿図2 同上 吽形 前面首内部 墨書

挿図3 同 部分

あり、滋賀惣見寺の応仁元年（一四六七）の院朝作の例がある。同じ院派であってもその形式、表現にはかなり相違がある。

金剛力士像はその形式の上で、大きく二つの系統に分けられることは従来指摘されている。それは和銅四年に造立された法隆寺中門の塑像の仁王の系統と、東大寺の奈良時代の像を運慶と快慶が復興したとされる南大門の金剛力士の系統とである。東大寺像系統の作例は比較的少なく、顔の向きや動勢に小異があっても法隆寺中門像の系統の作例は多い。この仲禅寺像も法隆寺の金剛力士像の系統に属すると云えよう。

仏教彫刻衰退の時期に遭遇し、院派の仏師としても晩年にかけて来している院勝の伝記のなかで、この仁王像の存在は盛時の造仏を証するものであろう。

註1

中野玄三 寂照院の仏像 国華九四七号 昭和四十七年七月

清水真澄 仏師院広とその作例 国華九七三号 昭和五〇年一月

同 鎌倉時代の院派仏師について

附、院派仏師事蹟年表 国華一〇〇一号 昭和五二年六月

註2

井上正 京の美術金剛力士展目録 解説 昭和四五年

倉田文作 日本の美術二王像 至文堂 昭和五三年十二月

註3

宝暦三年と九年の修理銘札が胎内に納入されていた。

註4

〔雨森善四郎氏所蔵文書〕○山城

丹波国々分寺地頭職事、絵所土佐刑部少輔光信并仏師院勝等申子細之条、糺明之処、於光信証文者還補本文無之、至院勝者、以不知行之地、称当知行、捧請文、掠給御下知、其咎在之、然代々御判以下明鏡之上者、不被及異論、但对光信、可被付替地之旨、雖有勅定、無相当地之間、先被折中之説、光信相共半分充可令領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

（飯尾貞運）

永正六年十月五日

（近江守）（花押）

散位（〃）

（斎藤基雄）

大仏師覺雄御房

図版要項

一 金銅觀音菩薩立像 背面（原色刷）

北魏太和八年銘 金銅造 全高二四・二cm

某氏藏

二 同

正面

同

一一一 松原三郎「北魏金銅觀音菩薩立像」参照

三 a・b 硯破絵卷

紙本着色 縦一五・〇cm

某氏藏

四 地藏堂草紙絵卷

紙本着色 縦一七・二cm

某氏藏

五 鼠草紙絵卷

紙本着色 縦一六・六cm

米国 フォッグ美術館保管

三十七 宮 次男「御伽草子と土佐光信」参照

八 a 金剛力士像（吽形）

京都 仲禅寺藏

b 同（呵形）

同

木造像高 吽形二一・八cm
呵形二一・七cm

猪川和子「大仏師院勝作京都仲禅寺金剛力士像」参照

九 五姓田義松筆 人形の着物

大阪 個人藏

明治一六年（一八八三） 麻布油彩 一四九・五×一二三・五cm
陰里鉄郎「五姓田義松筆 人形の着物」参照